

～環境学館いずみボラボランティアスタッフによる「いずみガイド」～

11月のデキゴト

第7回いずみ自然塾 飯盛川の植生

はじめに

2020年11月29日、自然塾は今日もコロナのため座学になってしまいましたが、なぞの植物、コウホネの話をじっくりとお聞きできる機会になりました。講師は高麗川ふるさとの会の福島倫子講師です。福島さんは、その他にも森の観察会と川の観察会をブライモリというグループを作ってじっくり観察するスタイルの観察を主催されています。今日の参加者も28名とたくさん集まって頂きました。

飯盛川のコウホネ

コウホネ（川骨）の存在は数年前、河津桜の見物人が見つけ、ネットで拡散し、坂戸市にも確認の依頼が入り、いずみから福島さんに調査をお願いした経緯があります。埼玉県準絶滅危惧種になっており、全国に分布するが埼玉県では珍しい植物です。

当初は海外から持ち込まれた園芸種ではないかとの憶測がありましたが、古老の昔からあったのと証言、2009年に講師も確認していること、そして1年間の調査の結果で、やや変わった在来種との結論が得られたようです。

何が変わっているかというと、

- ① ほぼ1年中花が咲いている（普通は夏のみ）
- ② 水面から首だけ出して咲いている（一般には水面にスイレンのような葉があってその上に咲きます）
- ③ 絶えず水流がある場所に生育している。（一般には浅い沼地に生育しています）

以上の特異性を持つため、新種と思って調べたが、ただのコウホネと分かったようですが、1年間、毎月調査した結果、坂戸のコウホネが他と違う理由が見えてきたそうです。

飯盛川下流の4エリアに分布し、それぞれの状況は以下の通りでした。

第1区は、ツルヨシが繁茂して、水面から葉（抽水葉）がでるが、他ではでない。第3区は増水期にはなくなる。第4区は常時水没状態である。

4つのエリアで抽水様がないのは、水量・水深・流れが農業用水なので変わるためと判断されました。その地域のコウホネを確認するとオゼコウホネは抽水葉の中で花を咲かす。シモツケコウホネは水上葉なし（水上葉がないため新種と認定）。コウホネは雑種を作ることが分かっている最近の調査でさまざまな形態が分かっているようです。しかし、坂戸のコウホネは水環境で違う葉っぱになること



今日の講師



コウホネの水中葉と茎

を示しており、抽水葉のあり、なしの研究対象として重要になると指摘されました。

四季咲きすることに関しては、1、2月は少なくなり、4、5月が最盛期だが一年中開花することが分かったそうです。1年間水温を計った結果、17度を下ることはない。この理由として上流側の水処理施設が22~28度と高い水温の排水を流していることに起因することを突き止め、新河岸川で新たに発見した群落でも処理施設が上流にあり12月~3月でも水温が18~19度となっていたそうです。また、大谷川にも新たに小さな群落を10個以上確認したが、水処理センターがないので冬は咲かない。水処理施設の存在が、開花の鍵になるかもしれないと結論づけられました。水温と開化の関連もコウホネの繁殖方法の研究に重要なヒントになりそうです。

コウホネとは

講師が第3区から実際のコウホネを採取してきて見せて頂きました。

骨に見える所は茎で根ではないそうです。川底に長々と伸び、樹のように枝分かれを繰り返し群落を作るのだそうです。種子繁殖もするが発芽率・定着率が極めて低く、自然に株分けされたほぼクローンだそうです。

葉っぱは水上に出るものとは違い、ワカメのようにペラペラです。この違いは面白いです。理由は明確ではありませんが、光の強弱であろうとの見解を示されました。

そして、花瓶に指しておくとうるそうです。水を吸い上げることができないからだを教えて頂きました。なるほど、水中にほとんど入っているので吸い上げる必要はないのですね。

花は、雌から雄になるそうで、種子は徳利型をしています。

コウホネの最大の特徴は原始的な植物であることで、スイレン目の直系で被子植物の進化の元に当たる植物、恐竜時代に既に誕生していたそうです。水中で進化した植物は茎がないのが特徴のようですが、コウホネにはあり、以前陸上生活をしてきた証拠になることでした。すべての生きものは海から上がって陸上で暮らすようになり、一部はまた水中に戻ったと考えられ、それがコウホネです。

コウホネ属は、広く分布しますが温帯（ロシア等）に主にいる植物で、日本の種は6種あり、その他の雑種を含めて13種だそうです。

コウホネの保全

「埼玉県のレッドデータブックに載っているから保全するのか？」と講師の問いかけです。

コウホネは川の管理者にとっては汚泥をためて川を汚す植物であり、厄介者だそうです。浅羽ビオトープでも準絶滅危惧種のミクリを水を汚すから処分する話が出るそうです。

ここにあるコウホネは、前記したようにおかしなことが多々ありますが、新種でもなくただのコウホネです。ただ、原始的な興味深い植物で、海から陸に上がってまた水に戻った進化の履歴などから未知なことが多々ある植物です。研究対象として保全してほしいと講師は言われました。

そしていつも議論になる生物多様性とは何かについても発言がありました。生物は色々関連し合っていて生きている。例えば100%、ランは菌がないと生きていけない。動植物たちが絡んで生態系ができていく。それが生態系である。よく間違われる多くの種がいるところが生態系豊かというのは場所ごとの特



コウホネの花



性があり、そんな判断はできないので間違わないようにと注意喚起がありました。生きものの世界は人を含めた命のネットワークできていることと覚えることが生態保全に繋がると結ばれました。

具体的なコウホネの保全ですが、第4区に浚渫を行うとの看板が立っていました。コウホネの危機です。コウホネを保全してほしいと県の環境部局に電話したところ管理は別なものと冷たく飯能県土整備事務所の電話を教えられそうです。また、断られるのではと構えて電話をしたところ、情報をありがとうございます。私たちも自然を大事にしたいが情報、知識がないと感謝され、浚渫をしないことになったそうです。埼玉県も保全を意識されているのがうれしかったです。河川法は1997年の改正で河川環境の整備と保全が目的に加わりました。しっかりその精神が埼玉県の現場に浸透していることが確認できました。

最後に

講座の冒頭に講師は植物の不思議を解き明かす観察会を主催しているとの話をされました。今日の講座はまさにその成果を伝えて頂いたものでした。坂戸には稀にみる清流となっている高麗川が流れ、オオタカが飛び、サワギキョウやコクラン、ホトケドジョウなどなぜここにいるのという動植物が確認されています。コウホネもなぜここにあるのか新たな疑問です。講座を聞きながら湧水の豊富な坂戸台地の地域性と高度成長期の波はあったものの地理的にまだ昔からの環境が残っている土地柄ではと直感的に思いました。コウホネのある場所も湧水の影響が大きな場所で、福島さんはなぜここにあるかは分からないが洪水にあいやすい場所だと言われました。開発しにくい場所です。坂戸には北方系や高原にある植物が貴重種として分布しています。これは湧水のおかげで夏涼しい環境があるからだと思っています。コウホネがほぼ年中咲くのも湧水との関連もあるのでは思いを巡らせました。知らず知らずの内に、福島講師の不思議を解き明かす活動に引き込まれる自分がいました。いずみの水の恵み塾のメンバーで長いお付き合いをさせて頂いていますが、いつも刺激を与えてくださいます。ますますのご活躍を祈念します (YI)